

令和4年度(2022年度)事業報告書



認定NPO法人くるみー来未

令和4年度(2022年度)事業報告

認定NPO法人くるみー来未（以下、「くるみ」と記載）

はじめに

初めてくるみの事業報告書を目にする方のため、くるみについて簡単にご紹介します。私たちは「自閉症支援を通してインクルーシヴ社会の実現」を目指している認定NPO法人です。以下のような問題意識から事業活動を展開して10年目になります。

<くるみが取り組む社会課題>

現代社会において知的・発達障害等のある人と家族の生活環境はとても厳しい。保育園での入園拒否、学齢期のいじめや体罰、部活に参加できない、成人期には離職や生活困窮、家庭以外の居場所がなく引きこもりがちになる等があり、ライフステージを通して親子で孤立しがちな現状がある。また、制度のはざまに居る当事者の場合は、一般社会になじむことができないが、福祉につながることもできないことがあり、さらに状況が深刻化しやすいが、自己責任の名のもとに放置されてしまいがちである。入所施設における殺傷・虐待事件が社会問題となっているように、障害に対する社会の理解不足は深刻であり、多様性をみとめあう社会とは程遠い現状である。

<課題に対する行政等による既存の取り組み状況>

行政は福祉サービスの拡充を進め、障害児者の通所先は増加傾向だが、依然として以下のような課題がある。

- ① 障害福祉サービスの供給量不足により、必要とする人に届いていない
- ② 成人期の居場所が足りない
- ③ 制度の狭間にいる当事者への支援が不足している
- ④ 障害福祉サービス以外に地域とつながりが持てる機会が少ない
- ⑤ 高齢者など隣接的立場で支援が必要な層との一体的な支援の取り組みが不足している
- ⑥ ③④⑤のような居場所や事業活動の「担い手」を育てる仕組みが不足している。

経済の停滞、少子高齢化の進行、地域社会の関係希薄化、要支援者の増加など大変厳しい社会情勢の中、公助の拡充は引き続き重要な課題ではある。しかし、短期間で障害福祉サービスが大きく拡充することに期待を寄せることは難しい。そのため、障害のある人や親同士のピア・サポート等、そして福祉専門職やボランティア等の力もうまく取り入れた事業活動が以前にも増して重要性を増している。川崎市が策定する「第5次ノーマライゼーションプラン(障害福祉施策の総合計画)」でも、公助・共助の役割は引き続き重要としつつ、互助(インフォーマル・サポート)の重要性について次のように記載されている。「自立した生活の維持に向けて、インフォーマル・サポートが地域の中で提供されるよう、多様な主体の役割分担による『互助』を支える仕組みづくりを進める(P.58/川崎市地域保活ケアシステム推進ビジョンに基づく取組の推進・「3.推進ビジョンの概要」)」。

私たちくるみは、自閉症などの発達障害、知的障害のある人の親が中心となり、専門家やボランティアの力も借りながら、本人や親の孤立を防ぎ、多様で複合的な課題に共に取り組むべく奮闘努力を重ね10年になろうとしている。

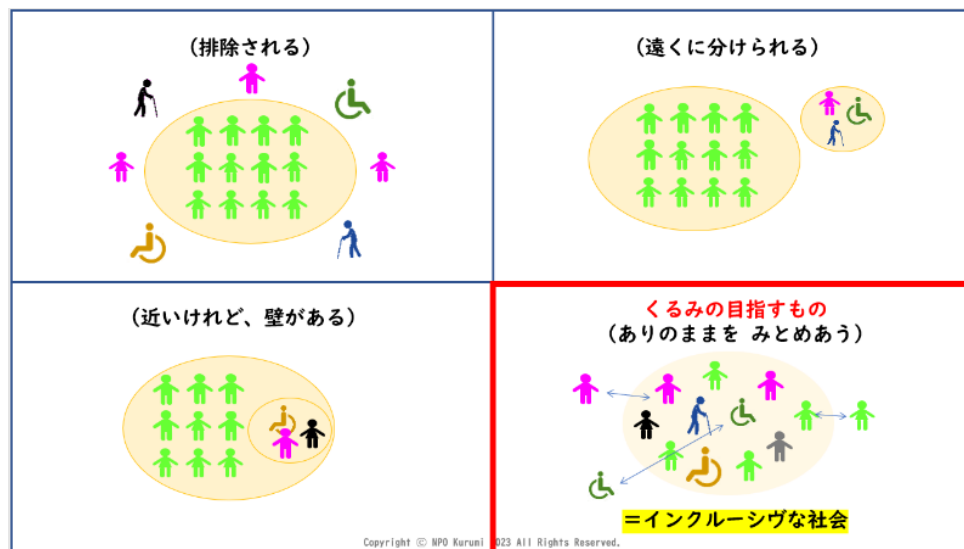
<くるみの目指す、中長期アウトカム(=ビジョン)>

川崎市中原区において、自閉症のように多様な特性のある当事者と家族が孤立することなく豊かに自分らしく生きることができるインクルーシブな地域・社会を創る。

<くるみの目指す、短期アウトカム>

1. 川崎市中原区の「くるみのうち」を中心に、当事者・家族が参加しやすいイベントや活動が定期的に行われ、支援対象者にとって安心して参加できる居場所となる。
2. 川崎市において、当事者家族や一般市民に対し、知的・発達障害についての理解が進み、お互いをみとめあう寛容な地域・社会に近づいている。
3. 川崎市において、くるみのビジョンに共感し、類似の取り組みを行う市民活動団体や個人が増え、新たな活動が展開されている。

くるみの考える「インクルーシブな社会」とは



事業活動への賛同者を増やし、社会的インパクトを拡大するため、2021年6月に川崎市より認定を取得しました。正会員数は27名(2023年6月現在)、活動参加者数は延べ3,000人超となっています。「インクルーシブな社会」のイメージ図を上に示します。くるみの活動では、この図の右下のような場面、すなわち「(本人がそう望むのであれば)その場に居られて、それぞれが「ありのままをみとめあう」場面を増やしていきたいと考えています。そのような考えもと、イベントや事業活動には障害のある本人と家族だけでなく、様々な方にご参加いただいています。

正会員は、障害のある子を育てる親を中心に、特別支援学校の教員、社会保険労務士、就労支援員などの専門家や市民活動家等がいます。障害福祉サービス事業を運営している訳ではなく、助成金や寄附金を主な原資としたインフォーマルな事業活動を展開しています。インクルーシブな社会の実現というビジョンに賛同して下さる多くの方からの応援とご支援を頂きながら、これまで9年間運営してきました。

法人の事務所兼活動拠点としては、川崎市中原区上平間地区にある「くるみのうち」を2020年2月から運営しています。月1～2回ほどの頻度で当事者・家族・支援者に向けたイベントや事業活動を行っています。

1. 報告期間 令和4年(2022年)4月1日から令和5年(2023年)3月31日【第9期】

2. 本年度の事業活動(総括)

本年度はNPO法人まちぽつとより「休眠預金を活用した助成金」を受けられる3年目(最終年)にあたります。前年度に引き続き、川崎市中原区上平間にある法人活動拠点「くるみのおうち」を中心に、「インクルーシブな社会づくり」に寄与するための事業活動を以下の通り実施しました。

- 自閉症など障害や特性のある本人と家族に向けたイベントや活動を実施しました(月1回程度)。
- 青年当事者の居場所づくりとして、夕ご飯をみんなで作って食べる会を実施しました(月2回程度)。
- 喫緊の状況にある青年当事者を「くるみのおうち」に受け入れるシェルターの役割を果たしました。滞在期間は4カ月に及び、自立生活に向けた相談支援と福祉職や各種制度、専門機関へつなぐ重要な役割を担いました。
- 川崎市社会福祉協議会、生活クラブ(宮前コモンズ)からの依頼を受け、研修会への講師派遣を行いました。
- 「くるみのおうち」の耐震工事を5～7月にかけて実施、安心・安全な居場所機能を充実させる事ができました。

コロナ禍が続く中、理事会・事務局・スタッフ・参加者のみなさんのご尽力を頂き、喫緊の状況にある人たちに必要な事業を届けられるよう努力した一年でした。とりわけ「危機的な状況にある青年を受け入れ4カ月暮らしを共にしながら自立生活に向けて支援する」というこれまでに経験したことのないチャレンジでは、くるみスタッフやつながりのある支援者の力を総動員し、本人の自立を目標に据えて取り組みました。現在は青年の一人暮らしが軌道に乗っています。他の事業活動も含めて、良い成果を残すことができたことが「7. アンケート結果」でもご確認頂くことができます。本年度も無事に一年を終えることができましたこと、関係者の皆さまに改めて感謝いたします。

3. 本年度の事業活動(詳細)

※ 以下の事業別損益表では、各事業の名称を次の通り表記しています。
「インクルーシブな地域社会づくりに寄与するための事業」⇒「インクルーシブ事業」
「自閉症スペクトラム当事者等のライフスキル向上に寄与するための活動支援事業」⇒「ライフスキル事業」
「自閉症スペクトラム当事者等に関する普及啓発事業」⇒「普及啓発事業」
「自閉症スペクトラム当事者等のライフスキル・就労・成年後見に関する情報提供事業」⇒「情報提供事業」

① 情報提供事業

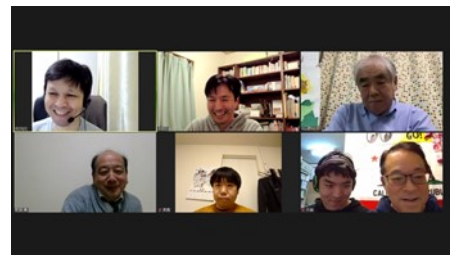
費用額: 47,860円 従事人数: 計12名 参加人数: 32名

事業内容	日にち	時間	従事者 人数	参加 人数	場所	対象者
おやじの会 (父親同士の交流会)	2022年6月4日	20:00～22:00	2	8	くるみのおうち(リアル)	知的・発達障害のある子の父親
	2022年8月27日	11:00～16:00	2	7	各自自宅より(オンライン)	
	2022年10月30日	20:00～22:00	4	7	くるみのおうち(リアル)	
	2023年1月28日	20:00～22:00	2	6	各自自宅より(オンライン)	
	2023年3月25日	20:00～22:00	2	4	各自自宅より(オンライン)	
小計	計5回		12	32		

「おやじの会」「コロナ禍で交流の機会が全くゼロになって困っている」という父子家庭の方からの切実な声があり、前年度から実施しています。そもそも父親は母親に比べて地域での交流の機会が少ない場合が多く、困り事があっても家庭内で抱えてしまいがちです。そのような孤立を和らげる相互交流ができる機会が必要と考えたのがきっかけでした。

オンラインであっても「障害のある子を育てながら働いている父親同士」という同じ環境にある人同士で安心して話ができること、地域の情報交換や気軽に相談できることの意味は大きいことがわかりました。そこで運営ルール(初参加の方をあたたく迎えよう／おやじの会での会話は口外禁止、など)を設けてどなたでも安心して話ができる場づくりに努めるとともに、Facebook 等でも告知した結果、参加希望者がジワジワと増えています。感染状況が落ち着いた時期には対面でのリアル交流会も行い、こちらも大変好評でした。お子さん連れで長時間の外出は難しいことが多いのですが、「くるみのおうちには安心して来られます」と父子でリラックスした時間を過ごして頂くことができました。合計5回のおやじの会を実施し、参加延べ人数は32人となりました。

社会的には少数派ですが、障害のある子を一人で育てる父親もいます。障害のある子の子育てで悩む父親もいます。そういうつもりはなくても、地域から孤立し、つながりを持つことが難しい父親もいます。いつも奮闘しているお父さんが、本会への参加をきっかけに父親同士の横のつながりを持てることは大きな意味を持ちます。今後も無理なく、ゆるゆると続けていければと思います。参加をご希望の方はお気軽にお問い合わせください。(連絡先: kurumi.oyajinokai@gmail.com)



② 普及啓発事業

費用額: 156,770円 従事人数: 計5名 参加人数: 86名

事業内容	日にち	時間	従事者 人数	参加 人数	場所	対象者
ゆめパのじかん上映会	2022年11月6日	終日	2	42	各自自宅より(オンライン)	一般市民
発達障害研修	2022年11月9日	13:30~15:30	3	44	エポックなかはら	
小計	計2回		5	86		

〔ゆめパのじかん〕 いつも大変お世話になっている「子ども夢パーク」のドキュメンタリー映画「ゆめぱのじかん」を開催しました。「オンライン上映会」は初めての試みでしたが、「自分の予定に合わせて鑑賞できてよかった」との感想が多く寄せられました。映画の内容はここでは多く書きませんが、「生きていれば、仲間がいれば、きっと何とかなる!」という力強いメッセージと勇気を改めて頂きました。素晴らしい映画なので、ぜひ多くの方にご覧いただけたらと思います。

〔発達障害研修〕 川崎市社会福祉協議会様からの依頼により、発達障害研修の講師を務めました。3年目となる今回のテーマは「発達障害のある人の青年期をどう支えるか?」会場参加とオンラインのハイブリッド開催でしたが、とても関心は高く、各々定員いっぱいのお申込みをいただきました。親の立場、そして支援者の立場から、これまでの子育てと青年たちとの関わりから学ばせてもらったこと。青年期に起こり得ること。親や支援者として試行錯誤してきたこととそこにかかる思い。そのような内容で2時間お話しさせて頂きました。

<ご参加頂いた方の感想>

- ・親目線の話が、とても勉強になりました。
- ・躰くポイント人は人それぞれ。その人に合った支援が必要。
- ・SOSを出しやすい環境を作ることの大切さがわかった。
- ・本日の学びを施設勤務の仕事に生かしたいです。



③ ライフスキル事業

費用額: 449,110円 従事人数: 計73名 参加人数: 106名

事業内容	日にち	時間	従事者 人数	参加 人数	場所	対象者
プログラミング講座	2022年6月18日	16:00~17:30	3	6	くるみのおうち	自閉症スペクトラム当事者等 および保護者
	2022年7月16日	16:00~17:30	3	6		
	2022年8月20日	16:00~17:30	3	6		
	2022年9月17日	16:00~17:30	3	6		
	2022年10月15日	16:00~17:30	3	6		
	2022年11月19日	16:00~17:30	2	6		
料理教室	2022年6月25日	10:00~15:00	2	6		
きんかい (青年当事者の居場所づくり)	2022年9月30日	18:00~21:00	4	2		
	2022年10月7日	18:00~21:00	3	5		
	2022年10月21日	18:00~21:00	3	4		
	2022年10月28日	18:00~21:00	3	3		
	2022年11月11日	18:00~21:00	3	3		
	2022年11月18日	18:00~21:00	2	3		
	2022年11月26日	18:00~21:00	3	3		
	2022年12月9日	18:00~21:00	2	3		
	2022年12月23日	18:00~21:00	3	4		
	2022年12月30日	18:00~21:00	3	4		
	2023年1月13日	18:00~21:00	3	4		
	2023年1月20日	18:00~21:00	3	3		
	2023年1月27日	18:00~21:00	4	3		
	2023年2月10日	18:00~21:00	3	4		
	2023年2月24日	18:00~21:00	3	4		
	2023年3月3日	18:00~21:00	3	4		
	2023年3月17日	18:00~21:00	3	5		
	2023年3月31日	18:00~21:00	3	3		
小計	計25回		73	106		

本事業の対象は「自閉症スペクトラムのある人と親と保護者」。目的は「本人のライフスキル(生きる力)向上に寄与するための活動を支援する(定款第5条より)こと」です。具体的には6月に講師をお招きしてお料理教室(ガパオライスと酵素ジュース)を行った他、昨年度好評だったプログラミング講座を6回の連続講座で実施しました。いずれも参加者の自主性や交流を意識した内容で、スキルを身に着けるだけでなく、一緒に料理や作品を作り上げたり、休憩時間中に語り合ったりして、あたたかな交流の時間ともなりました。

新たな事業活動として9月末以降、「きんかい(金曜の会)」を月2回ほど行いました。これは、「知的・発達障害等のある青年」を対象にした「気軽に話がができる居場所」として金曜夜にみんなで夕ご飯を作って食べる会です。ある時には、「青年たちの(精神的、経済的、社会的な)自立に向けた相談の場」として、またある時には「イベント実施前のスタッフミーティングの場」として機能して、またある時には「インターンスタッフとの顔合わせの場」として等、多様な目的を柔軟に満たすための居場所となりました。事業活動の特性上、一般に公募はせず、クローズドな場としての運営としました。

④ インクルーシヴ事業

費用額: 3,727,317円 従事人数: 計51名 参加人数: 209名

事業内容	日にち	時間	従事者 人数	参加 人数	場所	対象者
みんなでカレーを食べる会	2022年4月24日	19:30~21:00	4	16	くるみのおうち	一般市民
くるみのおうち開放日	2022年5月22日	11:00~14:00	2	5		
	2022年8月6日	11:00~14:00	2	7		
ドラム缶ピザづくり	2022年7月9日	11:00~14:00	5	22		
沼津バスハイク	2022年10月22日	8:00~18:00	7	18		
小計	計5回		20	68		

みんなでカレーを食べる会、アウトドア体験活動、バスハイク企画など、様々な内容の事業活動を「どなたでも来られるイベント」として開催しました。いずれのイベントも参加者には大変好評で、リピーター率は70%ほど。参加回数が多い人ほど満足度が高まる傾向がありました。参加回数を重ねる中で団体への信頼度が増し、「安心して参加できる」「かけがえのない、あたたかな居場所」として認知して頂き、参加者から「ボランティアとして参加したい」という申し出があり、スタッフとして活躍して頂くという好循環も見られました。

③④両方に言えることとして社会の中に居場所がない、と感じてきた親子にとって「くるみのイベントに楽しく参加できた」という経験

は、喜びや自信など、日常生活にポジティブかつ大きなインパクトをもたらすことが、「7. アンケート結果」でも裏付けられています。

また、支援者のみなさんも多くの悩みや葛藤を抱えておられます。くるみに相談に見える方もいらっしや、解決先を共に考えたりもしています。くるみを一社会資源として頭の片隅に置いて下さろうとしたりする方が少しずつ増えています。本人、親、福祉支援者、市民活動家などの立場や枠を越え、インクルーシブな社会づくりに一歩でも近づけるよう、これからもともに取り組んでいきましょう。

4. 活動参加者／支援者に関する報告

活動への参加者、従事者、寄付者の数は以下の通りです。ご協力・ご参加頂いた皆さまには心より感謝致します。私たちの事業活動は、支援者のみなさまに支えて頂くことで成り立っています。引き続き、ご参加・ご支援・ご寄付などにより、くるみの運営を支えて下さるようお願い致します。

・活動参加者	433 名 (+18 名)	※ () 内は前年比増減を示す
・活動従事者	119 名 (+22 名)	※ 活動参加者／活動従事者数は延べ人数
・正会員数	27 名 (+2 名)	
・年間応援会員	1 名 (▲1 名)	
・寄付者	61 名 (▲18 名)	

5. 事務局に関する報告

事務局は、組織の基盤として事業とのバランスを取りながら両輪で運営していく必要があります。くるみで行っている事業活動の屋台骨を支える事務局の活動内容は以下の通りです。

〔事務・管理・組織基盤〕

- ・所轄庁(川崎市)、法務局、税務署、労務に関わる各種手続き
- ・認定および条例指定維持のための各種手続き
- ・税理士事務所との顧問契約を継続、サポートを受けながら税務会計処理を実施
- ・休眠預金を活用した助成金事業(NPO法人まちぼっとPecs事業)に伴う各種手続きとミーティング

〔くるみのおうちの管理運営〕

事業の推進役として、昨年度より「くるみのおうち管理運営責任者」と「イベント推進リーダー」のリーダーシップの下で事業を展開。いずれの役割も事業推進には必要不可欠であり、各イベントや活動の成功の裏には事務局での大変な工夫と努力があります。綿密な打ち合わせや数々の事前準備は、忙しい中参加してくれる方たちが気持ち良い時間を過ごしてもらえるように、という思いの表れで、くるみの事業活動のコア中のコアです。これが現在の「くるみらしさ」を形作り、大変な中ではありますが、何とか維持していきたいと考えています。

6. 財務諸表に関する報告

〔貸借対照表〕

- ・総資産は約 465 万円で、対前年比▲183 万円となりました。一過性の工事費の支出分、総資産が目減りしました。
- ・負債は約 27 万円で、対前年比▲24 万円となりました。役員借入金等の返済等により負債が減少しました。

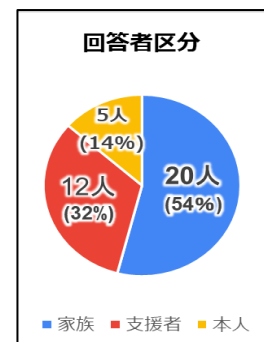
〔活動計算書〕

- ・収入の部は、助成金、会費・寄付、事業収益による収入が主で、合計約 326 万円となりました。助成金は休眠預金を活用した助成金(NPO 法人まちぼつと Pecs 事業)が中心です。本年度で本助成金は終了となるため、次年度以降は新たな財源確保が必要な状況です。
- ・支出の部は、事業費・管理費ともに対予算比較で若干の減となり、計 484 万円となり、ほぼ想定通りに着地しました。
- ・単年度収支は▲158 万円の赤字ですが、これは一過性の工事費の支出があったことによります。次年度以降は新たな財源確保を目指すとともに、メリハリのある支出計画によって新たな事業を開拓する必要に迫られています。

7. アンケート結果のご報告

今年度までの 3 年間、くるみで実施した事業に関するアンケート調査を 2023 年 1 月に行いました。障害のある本人、家族、支援者の生の声とともに、アンケート結果の概要を以下にご紹介します。

- 本アンケートの目的
 - (1) 休眠預金を活用した助成事業に関する 3 年間の事業評価
 - (2) 次年度以降の事業活動の方向性を検討する材料とするため
- 実施時期：2022 年 12 月～2023 年 1 月
- 対象者：くるみの事業活動への参加者(本人／家族／支援者)
- 配布、回収数：回収 37 部／配布 75 部(回収率 49%)



<アンケート結果の総括>

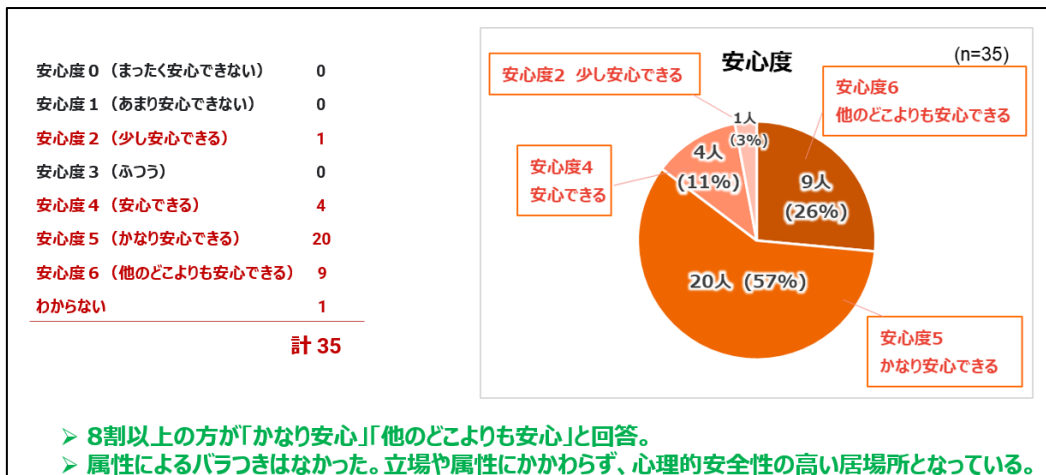
- ・くるみのイベントや活動に参加した人の多くが「安心感」と「信頼感」を持ち、また参加したいと考えている。
 - (2 回以上参加している人に限っては、100%の方が「安心感」と「信頼感」を持っている)
- ・上記の傾向は、属性による違いは見られず、立場が違ってもしっかり安心して活動に参加して頂くことができた。
- ・年齢や男女を問わず、くるみのイベントに参加することによって好影響があった、との声が多く届いている。
- ・障害のある本人や家族が参加しやすいイベントが定期的に行われ、安心して参加できる居場所となっている。
- ・一方で、以下①②のような指摘も複数名からあり、③と合わせて来年度以降の運営課題である。
 - ①運営者／スタッフへの業務の偏りと負担感があるのが心配。
 - ②がんばりすぎて、個人生活とのバランスが取れていないのではないかが心配。
 - ③継続的な資金調達手段が確立できていない

<質問項目と回答例>

1. あなたにとって、くるみとはどんな場所ですか？

- 我が家にとって、なくてはならない場所です。
- 安心して話せて支えになっている、今の生活に欠かせない存在。
- 居心地のいい場所。無理をせず、自分らしくいられる場所。代表やスタッフのお人柄で過ごしやすい雰囲気になっている。
- かけがえのない、安心できる、あたたかな場所です。くるみの存在が、今、ここで生活し続ける理由になっています。
- 子ども、おとな、障がいのあるなしに関わらず、お互いが対等に尊重しあえる貴重な場であると思います。
- 困っている人、困っていない人でも、受け止めてくれるところ。誰でも居心地の良いところ。
- 家でも職場でもない第三の居場所で、損得勘定や経済合理性と無縁でいられる心理的安全性の高い居場所です。
- 行政が向き合わず、支援が後回しにされている人々を救う場です。高齢者福祉と比べ断然遅れている分野に理事長が果敢に斬り込んで行っています。
- 今、この社会は、解決が容易でない、偏見と暴力があふれていて、普通に生きていくことがとても難しくなっています。くるみは、その中で、灯台、オアシスの役割を担っているのではと思います。

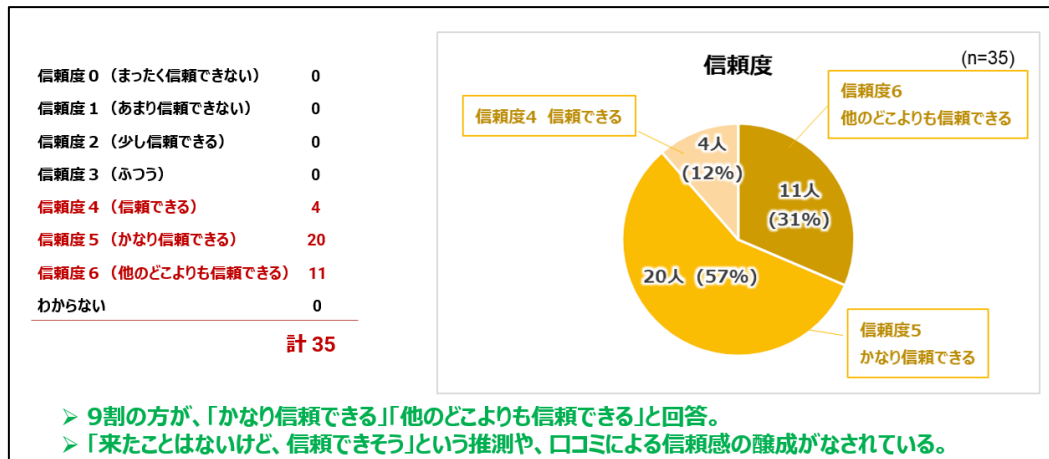
2. あなたにとって、くるみはどのくらい安心できる居場所になっていますか？（7段階）



3. 2のように感じる理由やきっかけがあれば教えてください。

- 一人っ子でもあり、家庭の事情で家族というものを味わえないわが子にとっては、自分の家のように、そして家族のように一緒に育ててもらっていると感じるからです。
- 当事者、家族共に、気兼ねなく安心して参加できる数少ない居場所であるから。
- 私と息子にとって、安心して、お話しができる場所になっています。
- 「くるみのうち」に関わるみんなが、事業の理念や意義を理解していると感じます。
- 息子についての情報がほぼない状況の中、そのままの息子を自然に受け入れていただいたこと。
- スタッフの言葉、イベントでの方針。実際誰をも拒まず迎え入れてくれるから。
- 日常的に利用しているわけではないけれど、何かあったら頼りにしたい、そんな場所です。
- アウトドアイベントの参加が主になっていますが、みなさん（参加者、スタッフ、ボランティア）がそれぞれの立場でイベントを心から楽しんでいらっしゃる様子が素晴らしいと思います。

4. くるみ(代表やスタッフ)は、信頼できる存在ですか？（7段階）



5. 4のように感じる理由やきっかけがあれば教えてください。

- 息子にとってとても近い存在で、長い間寄り添っていただいているからです。
- 理事長はじめ関わる方々に誠実な人が多いと思うから。
- 安心して、お話や相談ができる場所だと思います。
- 息子の事で悩んでいる時にわざわざお時間を作ってください親身に相談に乗ってくださいました。
- 生活上の問題で行き場がなく困っている青年に真摯に向き合い、支援に尽力されている姿を見て感銘を受けました。
- お互いの発言や行動に対して想像力を働かせて、お互いを理解しようしながら過ごし中で、その環境をアレンジし作り出す代表、スタッフさん、協力者の方々に信頼感が持てた。
- 何かあった時や客観的な意見が欲しい時には是非相談したいと思う存在です。
- くるみのコンセプトの「ゆるく、楽しく、出来る人が出来る時に出来るだけ」などは共感する方が多いのではないかと思います。
- いつも、細やかな気配りや、あたたかいお心遣い、お声をいただき、助けていただいております！誠実さと優しさに、いつもいつも救われています。

6. くるみの事業活動に参加して、あなたと一緒に参加した家族が何か影響を受けたことはありますか？

- 様々なイベントに参加させてもらい、色々な人と関われる楽しさを感じ、イベントに積極的に参加するようになった。
- 本人にとっても親の私にとっても、くるみの活動に参加する事で、温かい支えや繋がりを頂き、自尊心の低い子供にとっては、明日への生きる気力をもらえます。
- 参加したイベントで障害のある子供が楽しんでいる姿を見て、他の方や家族のためにも、くるみの活動に協力したいと思うようになった。
- 息子は「上平間に行きます」とよく言っています。私は、懇談させていただくうちに、新たな知識を得られています。
- こどもがピザ作りに参加して少し年上の人達と関わり、その人達の姿に少し先の自分のイメージが作れたようだ。
- 黒川のイベントに参加させて頂き息子が自然の中で物凄く喜び楽しませて頂いたからです。また行きたいとすぐに言いました。息子はやっぱり自然の中が好きな事もわかりました。
- 黒川野外活動センターで「ピザづくり」に参加した時、「くるみのイベントなら安心して参加でき、他の団体が実施するイベントよりも満足度が高い」とのうわさを知って初めて参加したというご家族が複数あって驚いた。

8. 休眠預金を活用した助成金事業からの学びと提言

くるみでは、本年度までの3年間、休眠預金を活用した助成金を頂いて、様々な事業活動を行ってきました。そこから得られた学びと提言を助成元に行いましたので、以下にご紹介します。

【当事者青年の受入れから得られた学び】

知的・発達障害のある人を取り巻く環境がもともと厳しい中、コロナ禍以降はさらに厳しさが増していった。その影響が特に大きく出ていたのがくるみに関わる当事者青年たちであった。彼らの多くはもともとDV等の理由で家庭に居場所がない、理解ある職場に巡り合えず仕事が長続きしない、精神疾患があり外出自体ができない等、社会的に孤立しやすい状態に置かれていた。コロナ禍以降、その状況に拍車がかかり、家から出なければいけないが行き場所がない、失職してしまって家賃が払えない、トラブルや犯罪に巻き込まれている等、より深刻な状況に陥っていった。

そのような青年たちを目の当たりにして、何も動かないわけにはいかない。当初の事業計画外ではあるが、そのような状態にある青年をくるみのおうちで一定期間受け入れた。短い場合は1週間ほど、長い場合は4カ月ほど、計5名の青年と暮らしを共にした。同じ釜の飯を食べ、寝食を共にする中で、彼らから出てきた言葉は「相談できる人がいない」「行ける場所もない」「制度のことはよくわからない」「親から『お前の努力不足』と言われて疲れた」等であった。

日本の福祉制度は「申請主義」と言われるように、制度を知り、自分の意思で申請しないと福祉サービス等の公的支援に繋がることができない。そのハードルはかなり高く、家庭に頼ることができない若者の多くはそこに辿り着けない。また、仮に相談に赴くことができたとしても、白い壁に囲まれた狭い「相談室」で「専門家」と言われる初対面の人が正面に座って「今日はどうしましたか？」と聞かれる状況で、自分の悩み事を素直に話そうと思えるだろうか？「相談したいと思える人はいないし、気軽に集えるような場所なんてどこにもない」というのが、彼らの偽らざる本音ではないだろうか？そのような問題意識から、くるみのおうちで受け入れた青年たちの自立を応援すべく、必要に応じて支援機関への繋ぎなどを行うとともに、厳しい状況にある青年たちが気軽に集える場づくりにも努めた。

彼らの多くは、くるみのイベントで進んでスタッフの役割を担ってくれ、他のスタッフや参加者から刺激をもらい活動を共にした。おやじの会にも喜んで参加するなど、活動への参加が増えて場が活性化するとともに、信頼できる大人との関わりが増えた。このように、彼らは一方向的に支援を受ける立場にいたるのではなく、くるみの事業の一翼を担っている。彼らの存在こそが、社会に希望や光をもたらしている。それはもちろん、彼らの多くは我慢するのが難しいとか、飽きっぽくて仕事を直ぐやめてしまうとか、言葉遣いが失礼だったりして、誤解されたり、排除されたりしやすい人たちだ。でも心の中は、実は情に厚く、友達思いの、とてもいいヤツばかりだ。これからは彼らの自立(自分らしく、何とか生き抜くこと)を応援しつつ、共に生きることを楽しみたい。

「指導する」とか、「支援する」とか、そんな上から目線の活動ではなく、あくまで彼らの目線に立ち、ともに悩み、苦しみ、たくさん話をして、お互いを理解しあいながら解決策を探していく。そんな事業活動をこれからも展開していきたい。そんな我々の意向に対して資金面で3年間の支援をして下さった休眠預金を活用した助成事業(まちぽつと Pecs 事業)の関係者には改めてお礼申し上げたい。

【上記を踏まえた提言】

文部科学省の調査「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果(令和4年)について(令和4年12月13日)」では、小中高校の通常学級において「学習面又は行動面で著しい困難を示す」児童

生徒が8.8%いることが示されている。くるみで受け入れてきた青年たちも通常学級、あるいは特別支援学級に席を置いてきたが適切な支援を受けられず、学校生活・社会生活に課題があったことを考えると、今後とても多くの青年たちが同じような困難な状況に置かれることは想像に難くない。これらの課題に対応するための施策が必要である。

まず、DVや生活困窮等の深刻な状況にある青年当事者を支援する「居場所」が地域に圧倒的に不足しており、これを拡充していく必要がある。くるみで青年受け入れをした際には、4ヵ月間暮らしを共にし、困りごとの相談に乗って一緒に考え、支援機関に同伴し、一人暮らしまでつなげる、という大仕事をほぼボランティアペースで行った。しかし、このような活動を地域に広げようとするとは簡単にはいかない。「それは専門職の役割だ」「私たちにはそこまでできない」という話になる。一方で相談支援事業所などの専門職は「ご本人が相談に来てくれないと動けない」となり、誰もそのような青年たちにアウトリーチしようとはしない。結果として対応は家族任せ、あるいは本人の自己責任とされ、当事者や家族が地域で孤立していく。

我々の活動に対して、多くの方から応援や励ましの声を頂いたものの、そもそも「なぜ地域にもっと気軽に集えて、相談できるような居場所がないのか？」という根本的な疑問に行き当たる。問題は放っておくと雪だるま式に膨らんでいき、後になるほど対処が困難になる。早い段階から予防的な取り組みができるよう、まずは地域に気軽に集い、困ったことを気軽に相談し合えるような場を増やしていくことが必要だ(川崎市内では川崎若者就労・生活自立支援センターブリュックが存在する。しかし、多種多様なニーズに応えられるよう、より多くの団体や企業、個人など様々な主体がそのような場の運営をしやすいような支援が必要である)。私たちくるみは、2020年2月に築50年の空き家から「くるみのおうち」を立ち上げ、「自前の活動場所」があることと、休眠預金を活用した助成事業に採択されたことで活動資金が確保されていたために青年受け入れが可能となった。

また、家庭に頼ることができない当事者青年ばかりでなく、地域で独居している高齢者や母子家庭など、地域に暮らす人たちの困り事は多様化・複雑化・深刻化している。知的・発達障害のある人と家族をはじめ、困難な状況にある人の多くは自分から助けを求めることができない／しづらい状況にあることを念頭に、障害福祉サービスなどの補助金事業だけではカバーできないニーズに柔軟に応えられる事業体を一つでも多く増やすこと、そのような市民の自発的な活動を、行政や中間支援団体等がアウトリーチ的に支援することが重要である。

例えば、「相談室」という堅い場ではなく、気軽に集えて、信頼できる大人が居て、何でも気軽に話ができる場を、地域にもっと増やすことはできないだろうか。障害や特性のある当事者青年だけでなく、ひとり親家庭、子ども、シニアも集えるような場として。地域の元気シニア力を活用したり、会社員がボランティア休暇を取って地域で居場所づくりに参加したり(会社も制度面でそれを後押しする)、大学生もそのような居場所づくりに関わったりする(大学は単位認定などでそれを後押しする)など、地域にインクルーシブな居場所を増やすためにできることはまだまだある。

そして、本事業で生み出した社会的インパクトを地域に拡大しようとする時、活動場所／人材／資金／運営ノウハウなどあらゆる面で社会資源が不足し、課題が山積している。そのため以下のような取り組みも必要である。

<活動場所>

- ・空き家活用の仕組みづくり
- ・耐震改修工事等の専門家によるフォロー体制整備
- ・市の遊休地を地域の居場所づくりに優先利用する仕組みづくり等
- ・インクルーシブな居場所づくりに取り組む人に対するインセンティブ付与

(複数年度の助成金(3～5年単位)、無償又は低額で活動場所として使える土地・建物を公募し、使いたい団体

とのマッチングを推進する仕組み、先進的な活動に対する行政による表彰制度など)

<人材面/資金面>

- ・利用者の実情に応じて柔軟に相談支援を行うことができる人材育成と予算措置
- ・地縁団体や高齢分野の事業所等とつながり、共通・類似の課題をともに解決する仕組み

<運営面>

- ・実践者による先行事例や優良事例を学べる機会を増やす
- ・中間支援団体等による居場所運営の伴走支援

休眠預金を活用した助成事業は、国民の休眠預金を原資としており、そこから得られた学びは地域に有効的に還元していく責務がある。上記のような気づきを活かすため、行政をはじめ、民間事業者、他 NPO 法人等と連携できそうなことがあれば、くるみとしても積極的に取り組んでいきたいと考えている。

以上